四手井綱英著「森林はモリやハヤシではない　私の森林論」

関西自然保護機構理事長　渡　辺　弘　之

本書は「Ⅰ私の森林生態学」,「Ⅱ私の自然保護と，出会った人びと」,「Ⅲ私の里山論」,「Ⅳ私の林野庁時代－林業政策および林業経済」，からなる。「関西自然保護機構会誌」,「グリーン・パワー」などに執筆された著者の最近の著作をまとめたものである。各章に「私の」とついているように，著者の主張・考え，あるいは不満を存分に語ったものといえよう。

「Ⅰ私の森林生態学」では育種に対する農業と林業のちがいを強調される。精英樹（エリート・ツリー）などを選抜しても，伐採まで長い年月が必要な樹木ではその最終の成果は疑問であること，吉野スギなど産地を無視しての広範な植栽が不成績造林地の出現につながったのではないかなど，林木育種への問題提起が扱われている。「Ⅱ私の自然保護と，出会った人びと」では，著者がかかわった京阪名学園都市でのワシ・タカ問題，そこでの論議と問題解決のむつかしさが語られる。「Ⅲ私の里山論」では里山という用語が著者による造語かどうかについて改めて説明する。その上で，樹木を萌芽更新させ適度に大きくなったら伐採，薪炭用材として利用するコナラ・クヌギ林は，林学でいう低林施業という森林の管理方法であり，里山にこの薪炭林を含めるのはおかしいという。

「Ⅳ私の林野庁時代」がやはり一番思いがこもっているようだ。著者の大学卒業後の秋田営林局，山林局，林業試験場での与えられた仕事を回顧する。中でも，当時山林局長や営林局長は事務官がなるものだったようだが，技術者運動として技術者がこのポストにつくべきだとの運動が語られる。これは実際には戦後ＧＨＱの後押しもあって実現するのだが，これは単なるポストの問題ではなく，営林局の技術者が日ごろの営林の試験・調査研究の成果を学会で発表していたものである，ところが試験・研究のすべてが林業試験場（現森林総合研究所）へ移され，結果として技術者の林学会（現森林学会）離れを引き起こしたと批判する。林学分野での基礎と応用の乖離が大きくなっているとき，この先人の努力は改めて知っておく必要があろう。

著者は４章に分けられているが，38の小文からなる。一部には記述の重複があるものの，記述は多岐にわたる。著者はすでに94歳になられるが，旺盛な執筆を続けられていること，幅広い興味，知識欲に感銘を受ける。

四手井綱英著「森林はモリやハヤシではない　私の森林論」ナカニシヤ出版　277pp，定価2,000円（2006）